



大阪府立北野高等学校図書館

第 1 号

2009.5.27発行

新緑が美しくて気持ちのいい季節ですが、新型インフルエンザで1週間も休校になるというこれまでに経験したことのない事態になりました。すぐに収束というわけにはいかないと思います。皆さんも感染しないよう当分は気をつけて行動して下さい。

さて、今年度も「図書ニュース」で本校の図書館にある本を中心にいろいろな本の紹介をしていきます。昨年から今年にかけて新しく図書館に入った本の中から紹介していきたいと思います。本の後にある【9 1 3 / M 8 3 / 4】などという記号は図書館での請求番号です。

万城目学「プリンセストヨトミ」(文藝春秋)【9 1 3 / M 8 3 / 4】

五月末日の木曜日、午後四時のことである。大阪が全停止した。長く閉ざされていた扉を開ける“鍵”となったのは東京から来た会計検査院の三人の調査官と、大阪の商店街に生まれた二人の少年少女だった…。

同じ作者の『鴨川ホルモー』が映画化されて話題になっていますが、万城目さんの小説のおもしろさはなんといってもその奇想天外さにあります。ファンタジーとミステリーをミックスしたような実に不思議な世界です。

京都を舞台にした『鴨川ホルモー』、奈良を舞台にした『鹿男あをによし』に続いて、大阪出身の万城目さんが満を持して発表した最新作です。

図書館には同じ著者の『ホルモー六景』『ザ・万歩計』(これはエッセイ集)もあります。

福岡伸一「できそこないの男たち」(光文社新書)【4 6 7 / F 1 / 1】

「生命の基本仕様」 - それは女である。本来すべての生物はまずメスとして発生する。メスは太くて強い縦系であり、オスはそのメスの系譜を時々橋渡しし、細い横系の役割を果たす“使い走り”に過ぎない。分子生物学が明らかにした、男を男たらしめる「秘密の鍵」。S R Y 遺伝子の発見をめぐる、研究者たちの白熱したレースと駆け引きの息吹を伝えながら、「女と男」の本当の関係に迫る、鮮やかな考察。

2007年に出版されて高い評価を受けた『生物と無生物の間』(講談社現代新書)も同じ著者の本で、図書館にあります。

ノーマ・フィールド「小林多喜二」(岩波新書)【910 / F14 / 1】

『蟹工船』の作者小林多喜二(1903～1933)、その生き方と作品群は、現代に何を語りかけるのか。多喜二に魅せられ、その育った街小樽に住んで、多くの資料・証言に接した著者が知られざる人間像に迫る。絵画も音楽も映画も愛し、ひたむきな恋に生き、反戦と社会変革をめざして拷問死に至った軌跡がみずみずしい筆致の中に甦る。

著者は1947年に東京で米国人の父と日本人の母との間に生まれ、現在はシカゴ大学教授。『祖母の国』『へんな子じゃないもん』『天皇の逝く国』などの著作があります。

水村美苗「日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で」(筑摩書房)

【810 / M12 / 1】

いくつもの新聞の書評で取り上げられた話題の本です。「西洋の衝撃」を全身に浴び、豊かな近代文学を生み出した日本語が、いま「英語の世紀」の中で亡びるとはどういうことか？英語と日本語をめぐる認識を深いところで揺さぶり、はるかな時空の眺望のもとに鍛え直そうとする問題作です。

同じ著者による小説、『続 明暗』『本格小説』(上・下)も図書館にあります。

島本慈子「ルポ労働と戦争」(岩波新書)【392 / S2 / 1】

テクノロジーが戦争を支える時代とは「民需と軍需との境界」が曖昧になる時代である。現在日本国内の労働はどのように戦争とかわかっているのか。在日米軍基地・自衛隊・兵器産業・公務員・大学・農業...、さまざまな「仕事」の現場から「戦争」を問うノンフィクション。

筆者の島本慈子さんは本校82期の卒業生。他に『戦争で死ぬということ』『ルポ解雇』(いずれも岩波新書)などが図書館にあります。

ばくいる

朴 一「在日という生き方」(講談社選書メチエ)【316 / P2 / 1】

日本人でもない。韓国・朝鮮人でもない。「異質」な存在として日本社会を生きる60万在日コリアン。二つの祖国に揺れたプロレスラー・力道山。「日本人」を志向した政治家・新井将敬(本校78期の卒業生)。日本というシステムと戦う実業家・孫正義(ソフトバンクの社長) - 彼らの半世紀を通し、「祖国」や「民族」の意味を問い、日本社会の「内なる国際化」を問い直す。

同じ著者ではないが、小熊英二・姜尚中編『在日一世の記憶』(集英社新書)も合わせて読むといいと思います。有名無名の在日一世52人の証言を集めた本で彼らの人生のあり方には圧倒させられます。

稗田和博「ビッグイシュー 突破する人々」(大月書店)【368/H7/1】

ビッグイシュー・ジャパンは日本で初めてのストリート雑誌『ビッグイシュー・日本版』を2003年9月に創刊しました。最初は月1回の発行でしたが現在は毎月1日と15日の2回です。雑誌を掲げて街中で販売している人々の姿を目にしたことのある人もいるでしょう。

ホームレスの販売者が1冊140円で仕入れ、300円で販売する。1冊売るごとに160円が販売者の手に渡る。チャリティではなくビジネスとしてホームレスを支援するというコンセプトで発行されている雑誌です。30ページほどの薄い雑誌ですが、中味は非常に充実していて読みごたえがあります。

ビッグイシューの構想に対して専門家は「100%失敗する」と断言したといいますが、現在『ビッグイシュー』は創刊6年目になります。本書『ビッグイシュー 突破する人々』は、これまで日本になかった壮大な社会的実験と呼ぶべきビジネスにかかわった人々の生き方や働き方をめぐる物語です。

片山杜秀「片山杜秀の本1音盤考現学」(ARTES)【760/K3/1-1】

片山杜秀「片山杜秀の本2音盤博物誌」(ARTES)【760/K3/1-2】

『レコード芸術』誌に連載した100本の批評をこの2冊の本に収録しています。『音盤博物誌』の方の内容を見ると、筆者は、シューベルトを近眼派音楽の夜明けと断じ、金満的ヴィブラートの淵源はクライスラーにありと喝破、のぶとききよし信時潔から坂本龍一に至る隠された楽統を暴き出し、ショスタコヴィッチと恋愛映画との意外な親和性を解明するなど、他の筆者にはない、縦横無尽な語り口で、作曲家について、演奏家について論じています。

ベートーベンやモーツァルトなどの高名な作曲家についてふれることは少なく、近現代の日本人の作曲家や外国の現代音楽の作曲家が多く取り上げられていて、内容があまりにもマニアックだと感じる向きもあると思いますが、音楽が歴史的・社会的な文脈の中でしっかりとらえられており、そのカバーする領域はクラシック音楽批評の枠に収まりません。まさに音楽の博物学者の面目躍如たるものがあります。

目から鱗が落ちるなどという表現はやたらと使うべきものではないでしょうが、この本を読んでいると「なるほど」や「へ～」の連続でした。音楽評論家の吉田秀和氏と音楽学者の岡田暁生氏もこれらの本を絶賛しています。

佐野洋子「シズコさん」(新潮社)【916 / S26 / 1】

「あの頃、私は母さんがいつかおばあさんになるなんて、思いもしなかった。」
ずっとお母さんを好きでなかった娘が、はじめて書いた母との愛憎の記録。

佐野洋子さんの名は絵本『100万回生きたねこ』の著者として知っている人も多いと思います。同じ著者によるエッセイ集『役にたたない日々』も図書館にあります。

最後にインフルエンザの話に戻りますが、大正時代の1918年と1919~20年にスペイン風邪と呼ばれるインフルエンザの大流行があり、一説では世界中で4000万人、日本でも40万人前後の死者が出たといわれています。北野中学では多数の生徒が欠席したので3日間休校になりました。2名の教員が亡くなっています。一度沈静化したにもかかわらず、再び大流行したのです。今回の新型インフルエンザは弱毒性といわれていますが、強毒性のものに変身するかもしれません。インフルエンザの概説書としては、ビヴァリッジ『インフルエンザ』、畑中正一(北野OB。63期)『現代ウイルス事情』(いずれも岩波新書)などがあります。